

海外語学研修 活動報告書

ダブリンシティ大学(Dublin City University)

【1】 研修に参加した自分なりの目的

2012年夏、私はアイルランドのダブリンシティ大学に留学した。アメリカやカナダなど、留学先はほかにもあったが、私がアイルランドを選んだ理由は、第一に、アイルランドがヨーロッパ圏の国であるということだ。ヨーロッパは私が世界で一番好きな地域であり、一番興味をひかれる場所である。ある場所について知りたいとき、いちばんいい方法は実際に住んでその場所の文化を肌で感じるということだというのが私の持論なのだが、この方法を試すのに短期語学留学はうってつけの機会だった。そのため、語学研修に参加しようと思い立った。そして、語学留学というのだから、もちろん、語学英語力の強化も目的のうちである。実際にネイティブの人々と会話をすることで今まで培ってきた自分の英語がどこまで通じるのか試したかった。さらに、アイルランドの英語は訛りがあるということで、生でアイルランドなまりを聞くことができるチャンスだと思った。

また、アイルランドといえ、2010年に自力での財政再建を断念したいわゆる経済破綻した国家でもある。経済破綻を経験した国家の現状を見てみたいというのもアイルランドを選んだ理由に入っている。

【2】 研修の概要

研修の内容として、ダブリンシティ大学の語学学習プログラムに参加・通学、滞在中は一般家庭にホームステイ、週末を利用したショートトリップやダブリン近郊への日帰り旅行などがあげられる。また、ダブリン市内でのアイルランド文化鑑賞・体験もあげられる。

ダブリンシティ大学では、朝の9時から13時まで約20分の休憩をはさんで授業が行われた。クラスは、通学初日に行われたプレイスメントテストの結果に基づいてレベル別に分けられ、1クラス10人前後の少人数クラスだった。生徒の国籍は様々だが、主にヨーロッパ圏からの留学生が多かった。研修後期になると、宗教上の行事の関係で帰国していた中東からの留学生が加わった。通学方法は、私の場合、徒歩とバスだった。徒歩だけの生徒や大学内の寮に入っている生徒もいた。

ホームステイ先は、たまにダブリン市内に住んでいる長男が訪れる、アイルランド人夫婦のお宅で、留学生は私一人だった。生活に支障はなく、よくしていただいた。

ショートトリップや、ダブリン近郊への日帰り旅行などの課外アクティビティーは週替

わりで内容も豊富だった。週末は主に土曜日にダブリン近郊の観光地などに行き、他の留学生と交流しながら観光を楽しんだ。一度、事前に日本で知らされていた地方都市へのショートトリップに行き、ダブリンとはまた違ったアイルランドの空気を味わうことができた。平日には授業が終わった後、教師の案内でダブリン市内の名所に行き、ダブリンのことについて学ぶことができた。毎週木曜日は Night Out という大学主催の交流会があり、今まで話したことのない留学生とも交流することができた。

アイルランドの文化体験としては、アイリッシュダンスという伝統の踊りを鑑賞した。日本でも公演したことのあるグループのもので、外国人である私たちでもとても楽しめる内容となっていた。

【3】研修の具体的な成果

研修を終えて成果があったことと言えば、英語に対する戸惑いや、英語を話す不安感というものが薄れたことである。研修に行く前は英語を話す、使うという機会に直面すると身構えてしまうことが多かったのだが、今では身構えることなく、自然と言葉が出てくることが多くなった。もちろん、まだ勉強中なのでスラスラと、というわけにはいかないが。

また、今回アイルランドに行ったが、他の国からの留学生との交流を通して今まで関心がなかった国の文化にも興味を持つようになった。国際学部国際文化コースに所属している身としてこの変化は意外ではないが、興味を持つきっかけが実際にその国に住んでいる人との交流であるということを考えると、非常に貴重な体験をすることができたのだと改めて実感した。

【4】研修を通して学んだこと

今回の研修を通して、母語でない言葉で伝えることのむずかしさ、楽しさを知った。そして、国際共通語としての英語の重要性に気づくこと、また、経験することの大切さを知ることができた。

英語は私の母語ではない。何年も前から学習し、身に付けた外国語である。自分のものではない言語で、その言葉を母語とする人と会話をし、お互いに理解しあう。今までは教師相手に話すことぐらいしかなかったが、実際に英語を母語とする人と話すことによって、自分が思っていた意味とはニュアンスが違うものや、全く新しい言葉を学ぶことができた。

国際共通語としての英語の重要性に気づくことができたのは、他の国から来た留学生と話すのに英語は不可欠であったし、むしろ、英語での会話しか選択肢がないという事実があったからだ。私は現在、大学でイタリア語を履修しているが、流暢に話すことはできないし、通じたとしても、イタリア人だけである。他の、たとえばドイツ人やサウジアラビア人と会話するにはどうしても英語しかない。そのような状況の中で、世界中に浸透している英語の力と、英語の重要性を強く感じた。

また、何事も経験とはよく言うが、今回の研修ほどそれを強く感じたことはなかった。

異国の地において何もせず、ただ勉強するだけ勉強して帰ってくるのではもったいないと
思い、何かしらの機会が与えられればなるべく参加するように努めていた。他の留学生と
一緒に生徒だけでダブリン近郊の町へ行ったりしたこともあった。とにかく何かやらない
ことには始まらないし、何もわからない。そんな信念のような想いが生まれた。これらは
すべて今回の留学があってこそ生まれた考えである。